

105 ルネサンス・バロック美術とデッサン

デッサンの持つ表現判断上の意義について

2024

真鍋友範

1 デッサン習得の意味

レオナルド・ダ・ヴィンチが解剖によって調べた筋肉や骨格の構造は、美術解剖学という位置付けで現在もファイン・アートを学ぶ学生の学習素材として、役立てられている。

デッサン力の習得は、美術実技を学ぶ上で必須に必要とされる能力であるが、何故それが必要であるか、疑問に持つことは少ない。カメラなど存在しない時代において、形の概念を相手に伝えるには、形を正確にスケッチする必要性は容易に想像できる。

物を見て、正確に写し取ることは、考えるほど容易ではない。何故ならば、目から入る情報を、そのままストレートに受容しているのでは無いからだ。

つまり、脳内の意識のフィルターを通して、外界を無意識に歪めて見ている。

それ故に、正確に写し取る為に、少々デッサン訓練が必要になるのだ。

ではデッサン訓練で、どのような要素が補正されるのか。そこを明らかにしよう。

デッサンの訓練に適しているのは、石膏像だ。明治時代に政府に雇われたイタリア人の画家や彫刻家は、石膏像を携えて日本の地を踏んでいる。

石膏デッサンに於いては、正確に形を再現する為に、細部までしっかり観察する能力を高める必要が生まれる。

しかし、最初から闇雲に一部のみを見るとか、細部のみを見るのでは無い。

- ① まずは、頭部・首部・胸部各パーツの用紙面上の配置からだ。比例を見ながら各部バランスを取る。この時、役立つのが、スケール棒だ。自転車スポークでも代用可だ。3Dを意識してバランスを整えていく。スケール棒を使った3点測量は重要な位置確認方法だ。この段階を軽視すると、後戻りが大変になる。
- ② 同時に行うのはムーブメント（ムーブマン）の確認だ。これを行わないと、対象の大きい特徴、動勢が表現できない。
- ③ 光の方向を意識しながら、大きい明暗コントラストを把握し、立体を意識して、鉛筆デッサンならば、クロス・ハッチングやシェーディングで描き進める。
- ④ 時間の経過と共に、鉛筆を取り替えながら、多段階の明暗表現に移っていく。
- ⑤ 質感（テクスチャー）を意識し、練りゴムも併用して、全体のバランスを整えながら、3次元の立体を再構築していく。
- ⑥ 対象物の周囲も描く場合、被写界深度を意識し、描画対象と周囲の空間との表現上の差異が表現できているか、を確認して完成。

このように、デッサンに於けるモノの見方としては、概要を大まかにとり、次第に細部へと認識を深めていくという認識工程を取るのが普通だ。

形態認識も、また同様だ。

2 デッサン力の修得は美大入試の為だけでは無い。

実は、デッサンの習得には論理的思考力が必要だ。【何故そう見えるのか、という相手側（観衆）からの疑問に答えられる論理的組み立てを、デッサンという描画面を通して再構築して見せる必要があるからだ。

つまり、デッサンは、見えている表面だけを、一方向からの、見えるままに写し取るのではない。もしも、そう考えているなら、貴方は、間違っている。

何故そのように見えるかを、本人が深く理解していないと、真実を描けない世界なのだ。

ここで、見るという単純な行為の裏での、膨大な情報習得が必要となる。

つまり、描く対象を取り巻く周囲の世界は、どうなっているのかを、立体的に認識する必要がある。

この立体認識がなければ、対象の位置関係を正確に把握することができない。

見るとは、つまるところ、見ている本人の視点の位置からのみ捉えるのでは無いという意味だ。

多視点からの3次元把握は、デッサンにおいて、重要な視点なのだ。
言い換えれば、脳内での視点の3D移動が自在に行われる必要がある。

例えば、次の例が分かりやすいだろう。



《聖マタイの召命》カラヴァッジョ

上記図版の左端の人物は、この画面を平面画面として見てしまい、髭男の横であるように感じる人もいる。

しかし、画面は立体であり、実際には45度斜め前に、若い収税人は位置している。

この状況を、立体として把握できない場合、髭男の人差し指は、このうつむいた若者に向かってしていると誤認識するのだ。

(上からの簡略な位置関係図)

眼鏡の老取税人

● 髭男

● 若い収税人

ルネサンス・バロック期の西欧画では、見ることによる対象への理解度は、見る側がデッサンを知っていると、知らないでは、多大な違いが生じることになる。

[PREV](#) ← ● → [NEXT](#)